

2015年9月30日

木島プロデューサー 講演会

風景画誕生のドラマ

カレンダー 一月曆画の世界を中心に

木島俊介 (Bunkamura ザ・ミュージアム プロデューサー)

もっとも重要な作品はここに展示してあります、レアンドロ・ダ・ポンテ、通称バッサノーという画家の12カ月図です。イタリア料理がお好きな方にはこの風景は大変記念すべき風景ですが、ここに描かれています山は、モンテ・グラッパといいまして、グラッパと言えば、お酒好きの方はたぶんご存知だと思わうんですが、ぶどうの搾り粕で作った日本で言う焼酎です。それはこの山にちなんで付けられた名前なんです。その山の麓はぶどうの産地です。バッサノーは麓にある低い場所ということで、オランダとかベルギーを「ペイ=バ」とフランス語で言いますけれども、「バ」というのは低い土地という意味です。ベルギーは水面より低いということでそういう名前がついています。この画家はモンテ・グラッパの麓のバッサノーというところで生まれ、活躍した画家なんです。これはイタリア、ルネッサンスの発生地であるフィレンツェと北方、つまりアルプスを越えてフランスに入ってペイ=バ、つまり低地地方、ベルギーオランダに入る。そして北方美術、ファン・エイク兄弟を筆頭として、北方ルネッサンスというものが起こるわけですが、その中間をつなぐあたりで活躍した画家なんです。もちろん一番近い場所はヴェネツィアで、おそらくヴェネツィア派のベリーニ兄弟などの技術、その流れを汲んだ画家ですが、北方美術の影響を受けていると言えます。

この12カ月図というのは、あまり日本には例がないのですが1月から12月までの曆があるんですね。曆に付けられている画像、これがヨーロッパで大変発展するんですが、そのおそらくタブロー、動かせる作品としては最大の作品です。皆さん、これらの作品はウィーンに行かれても見ることにはできなくて、倉庫からひっぱり出してきたものなんです。ウィーンから何人か学芸員が来ましたけれども彼女たちも見るのは初めてだと言って大変喜んでいるような作品です。またウィーンが重要視しているのは、変わり者の神聖ローマ皇帝がいるんですが、そのルドルフ2世がウィーンからプラハに遷都しますが、そのルドルフ2世が持っていた作品なんです。歴史上、ハプスブルク家ということになるんですが、けれども、それらの皇帝の中で変人と言いますか、美術愛好家と言いますか、

クンスト・カマー (Kunstammer)、ありとあらゆる不思議なものを集めていた皇帝です。その人が持っていた作品なんです。残念ながら12カ月ですから12枚あるはずなんですが、ここには9カ月分しかないんです。《7月》が2枚にわけられているのは、ルドルフの後にこの作品を手に入れた人が、おそらく自分の部屋に合わなかったんでしょう。半分に切って小型にしてしまっているんですね。それから今ぶどう酒の話をしましたけど、残念なことに《8月》(図1)まであって、《9月》と《10月》がウィーンにはないんですね。その2枚はプラハに残されていて、《12月》はなくなってしまっています。なぜ12カ月につけられた画像が重要なのかということをお話して、それが密接に「風景画の誕生」のみならず、「静物画の誕生」、「風俗画の誕生」と結びついている非常にベーシックなヨーロッパの美術作品であるということをお話するというのが、今夜の趣旨なんです。



図1 レアンドロ・バッサーノ (本名：レアンドロ・ダ・ボンテ) 《8月》1580-85年頃、ウィーン美術史美術館

ヨーロッパに暦の画像、暦を飾る絵画ができたのは非常に古い時代でした。現存している一番古い作品は、現在アテネにありますけれども、もちろん、これはギリシア時代の神殿に付けられていたレリーフです。それは現在アテネで見ることができるんですけども、何が描いてあるのかよくわかりません。それからローマ時代になりますとモザイクの美術というのが大変発展するわけで、これはシュトゥットガルトの図書館の本の挿絵(図2)ですけれども、ローマ時代に床に描かれたこうしたモザイク画の一番豊富なコレクションはチュニジアのバルド美術館にあるんです。その原型という12カ月がこれです。1月から始まって一回りして、それが1月の黄道12宮、皆さん星占いなんておそらく読んでらっしゃるでしょうけど、春夏秋冬と4つの季節が並べられ、中央の変な男は年の変わり目のヤヌスというローマの神様なのですが、たいてい2つ、過去を向いている顔と未来を向いている顔とに描かれるのですが、ここでは太陽と月とが描かれています。こういう形で12カ月図と星座と四季との組み合わせでカレンダーの装飾がなされていました。



図2 《天文学的暦とスワビアの殉教者行伝》1180年頃、シュトゥットガルト図書館

これが6世紀になりますとヌルシアの聖ベネディクトが現在のローマとナポリの間にありますモンテ・カッシーノの丘の上に、ベネディクト派の修道院をつくるんですね。その修道院のお祈り時間というものを決めるんですよ。1日を8つに区切りまして、午前0時に始まって3時間おきに24時間お祈りをする。その時間にどういうお祈りをするか本に書く必要があったんですね。聖書、お祈りのための書物、そういうものが修道院の生活とともに出てきます。この人物は世界で最もリッチなお姫さまです(図3)。ブルゴーニュのマリー、彼女がオーストリアのマクシミリアンと結婚したためにネーデルラント(現オランダ、ベルギー等)の領土が全部、神聖ローマ皇帝領になってしまったのです。彼女が作らせたお祈りの本を自分で見て、本を読みながらマリアさまのところへフィアンセのマクシミリアンとお参りするという内容を持っています。



図3 マリー・ド・ブルゴーニュの画家《時禱書を開く貴婦人》マリー・ド・ブルゴーニュの時禱書より、1477年頃、ウィーン、オーストリア国立図書館

女性用はこのくらいの大きさの本で、最初のところに、カレンダーが書いてありました。今日はマリアさまのお誕生日とか、キリストの降誕の日とか、そ

れを見ながら、今日のこの時間にはどうい^いうお祈りをしなければならないかがわかります。時禱—ホラリウムというラテン語は、時間によってお祈りをするという意味です。時の禱りと書きますけれども、そういうものが修道院とともに発達してきますと、だいたい14世紀くらいから、一般信徒、つまり修道士や聖職者のみならず、一般の王侯貴族、俗世の人たちもこれを欲しがるようになるんですね。そして、これでもかとお祈りの本、時禱書をつくります。その最大の、もつとも豪華な、おそらく市場で取引されたら、もつとも高価な美術作品になるんじゃないかというのが、皆さんにお渡ししている資料にあります『ベリー侯の豪華時禱書』、その中にある12枚のカレンダーです(図4)。この大きさが異常に大きいんです。ヨーロッパには紙というものがなかったわけですから、本を作るために一番高級なのは牛の赤ちゃんをまだお腹にいるときに取り出して、それをなめして本を作ります。200何枚の子牛の皮が必要で、それを折りたたんで420ページくらいになるんですね。そこに136点、イラストレーションが描かれているんですよ。単なる一冊の本ですけれども、その中に130点の名画が描かれているということになるんですね。このカレンダーの頁がだいたい26センチ、横が13センチくらい、それぐらい、超豪華なということで『ベリー侯の豪華時禱書』は、本当に最も貴重な美術作品のひとつであろうと思います。そういうものに結実していくんですね。



図4 ランプール兄弟《4月》『ベリー侯の豪華時禱書』より、1411-16年頃、シャンティイ・コンデ美術館

貴族たちはこれ持ってないと貴族ではないというように時禱書は無数にあります。15世紀の作品になりますと、ベッドフォード公爵の時禱書(図5)をみればよ

くわかりますよね。収穫の秋と我々は言いますけれど、ヨーロッパのもっとも重要な穀物は小麦ですから、秋に蒔いて8月に刈り取るというかたちです。ところが、面白いのは南イタリアで作られた時禱書と北方のベルギーで作られた時禱書では当然各月の営みがずれるわけですね。ベルギーでは8月に小麦を刈り取るけれども、イタリアでは7月に刈り取るというかたちで、その図像の変化によって、その地域の文化がわかるという面白い展開をしていくわけなんです。

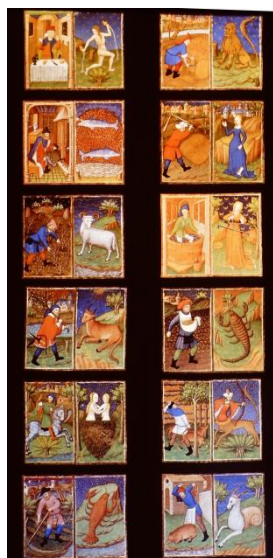


図5 ベッドフォード公の画家『ベッドフォード公の時禱書』1430-65年、ロンドン、大英図書館

それで実はですね、「どうして風景画が誕生したのか」、という問題には各国の著名な美術史家が持論を展開しております。日本で翻訳されています二人のイギリスの有名な美術史家の意見を申しますと、一人はケネス・クラークというナショナル・ギャラリーの館長を務めましたイギリス出身の美術史家です。イギリス人の風景画に関する一つのアイディアとはワーズワースです。ワーズワースによりますと、清浄な自然の中には、心を開いて自然を見つめる人の精神、魂を浄化する効験、役割があるという発想なんですね。つまり我々は自然の中で自然の美しさ、清らかさに触れることによって風景画を生み出した、そういうワーズワース的な発想はターナーという偉大な風景画家を擁護しましたジョン・ラスキンという19世紀の思想家に受け継がれてイギリスの美術市場が確立していきます。ケネス・クラークはまさに、イギリスのワーズワース派とはいませんが、そういう流れに立ったものの見方をしています。それが『風景画論』というかたちで日本に翻訳されて、ずいぶん版を重ねてみなさんご存知かもしれません。もう一方はウィーン学派で、ドイツ語圏にはヴィンケルマンを始めとして長い長い美術史の歴史があるんですが、そこで育ってイギリスに亡命した、エルスト・ゴンブリッチです。これはまったく同じイギリスで活躍しながら、ゴンブリッチはロンドン大学の教授で、彼らによって初めてイギリスに美術史という講座ができるわけですけども、ゴンブリッチは自然か

ら刺激を受けて、それをアートにするということは起こり得ないと言っているんです。ケネス・クラークを意識した意見を述べているわけですが、偉大な天才たちが規範を作るといって、ノーム・アンド・フォルムという論文を書いていまして、これも日本語に翻訳されていますから、この二人の例を挙げるんですけれども、偉大な天才画家たちが概念か作例をつくらなければ、後の人たちが自然を美しいと言うわけがないと、極めて美術史的なものの考え方をしています。彼が挙げている例が、イタリア、ルネサンス真っ盛りに活躍したアルベルティですね。アルベルティの建築論がだいたい1450年くらいに記されますから、まさにフィレンツェのルネサンスの真っ盛りにこの本が書かれているわけです。そこでアルベルティはどんなことを言っているとゴンブリッチが取り上げているかと言いますと、アルベルティの建築論の中に、私は野原や小川、花が咲いていることに大変癒される。私は眠れないときは田舎の小川のせせらぎを思い出して安らかな睡眠につくと言っているんですね。このゴンブリッチの取り上げ方は実に平々凡々たるものなんです。なぜかと言いますと、文明が始まって以来、政治に倦んだり、都会に倦んだり、人間関係に倦んだりした人たちは必ず田園に出かけて行って、牧歌、テオクリトスに始まり、皆さんよくご存知のロンゴスの「ダフニスとクロエ」という物語ですけれども、ギリシア以来ずっと羊飼いの生活にあこがれた精神構造があるんですよ。アルベルティと仲良くしていましたメディチ家はフィレンツェの郊外に10余りの別荘を持っています。そういうのは昔からあるんです、現在も続いている。この牧歌の伝統を引いて書かれたのは、三島由紀夫の『潮騒』ですけど日本にも流れて来ているわけです。なぜかという、レクリエーションというものは、確かに都会を去って田舎へ出かけていくけれども、そこで癒されるだけじゃ文化にならないんですよ。メディチは政治の方にいったかもしれませんが、アルベルティはそこからですね、作品を生み出す、こういうところに進んで行かないと美術史は成立しませんし、文化も文明もできあがらないんです。つまり、レクリエーションという言葉は、現代の我々は現実逃避である、あるいは慰めであると捕らえていますけれども、そうではないんです。レクリエーションというラテン語は再び創造するという、ルネサンスとまったく同じ意味を持っているわけです。そうやって田舎の自然の一体感に心を洗われて、心を無にしたところで新しい創造に向かう。それがレクリエーションの意味であり、田舎にアーティストが出かけていかなければならない意味なんです。なぜそういうことが起こるのかというと、ギリシア人から人間が感じていたことです。ギリシア語ではフィシスというと自然ということになりますし、ラテン語のローマ人たちはそれにナチュラという言葉を使いました。それがネイチャーという英語となるわけですが、ナチュラは何を言っているかという、あるものが自然に芽生えてくるということを行っているんですね。生きてるわけですよ。それが自然なのであって、そういうところに行く事自体が、アーティストがレクリエーションに

進む、新しい創造に向かって進むことへの刺激になる、あるいはゼロ次元からやり直すきっかけを与えられる、これが自然というものだ、ということはギリシアの哲学にも説かれていることなんですよね。ですから、この二人の学者が言っていることは、両方重要なんですよ。私たちの文化というものは、突然変異では文化になりません。つまり、何か一つの作品の半分の価値は伝統です。半分の価値は新しい革新です。その両方がなければ、新しい創造はあり得ないんです。それが文化、あるいは美術史を作っていくわけですね。そういうかたちでいくなれば、ケネス・クラークの言っていることも、ゴンブリッチの言っていることも、ひとつのことの半分半分を言いつこしてるということで、これは総合化されて二つがあって初めて歴史的な意味を持つ、美術史というものが成立するということですね。

こうした流れ以前にも、現存するもの、ギリシアの紀元前2世紀以来、継続して来ているということをお話するのが今回の講演の趣旨でもあります。

『ベリー侯の豪華時禱書』というものは、大変奇異なものです。こんな大きなカレンダーが描かれたということは、前例があり得ないんです。なぜかといいますと、イタリアという国で絵画といえば壁画です。モザイクでありフレスコ画です。これが北方にいきますと、絵画といえば、タブローです。もとは板ですけれども、次第にキャンヴァスに描かれるようになります。それが寒いですから、壁に飾るものはタピスリーです。このタピスリーにはまったく空間がないんです。イタリアの特にフィレンツェの技術はですね、一番の基本はものに影をつけるということです。影をつけることによって我々は騙されて、そこに立体があると思う。その立体が積み重なっていくと遠近法になって、奥行きと近いところが表現できる。つまり、逆三角形の世界観というものが絵画の中にあるわけです。モンテ・グラッパに向かって、引けていく世界です。ところが北方の絵というのは小さなものから発達してきたので、パースペクティブは関係ない。思想的にはアンルミニュールというのは、イルミネーションという言葉で表されますけれども、アンルミニュールというフランス語は神の言葉を輝かしめるという意味です。つまり、聖書の中に書いてあることは神様の物語であるわけだから、本に作るときはそれが輝かしいものにされなければならないということです。もっとも高価なものは金です。金によって文字を飾り、絵を飾るわけです。私はベリー侯の本を翻訳するときに、シャンティイに行って実物を見せてもらいましたが、持ち上がらないんです。それくらい金を使っているわけです。それはなぜかという、神の言葉、聖書の言葉を光あるものにする、輝くものにする。神の光はこの世界に満遍なく満ちているのだから、影はない。イタリアの進んだ科学的な思考をする人たちは、遠近感というものを発明しましたがけれども、ヨーロッパの北の方で、つまりベルギーで発達する絵画というのはミニチュアチュールに近いんです。非常に細密に細かな世界を描いて、それを光輝くものにする。こういう形で発達しているものなのです。ところが、

この『ベリー侯の豪華時禱書』だけは、群を抜いて日々の行事が描かれていることになる。ベリー侯はシャルル5世の弟です。蔵書狂で王様よりもすごい本を持っている。ネーデルラント出身のランブール3兄弟に注文して、今メトロポリタンにある、『ベリー侯の美麗時禱書』(図6)を描かせたんです。



図6 ランブール兄弟《2月》『ベリー侯の美麗時禱書』より、1408-10年、ニューヨーク、メトロポリタン美術館

それが完成するのは1405年です。これの成功によってベリー侯はいたく喜んで、もう一冊作ろうということで作らせたのが、「トレ・リッシュ」と呼ばれている『ベリー侯の豪華時禱書』です。どうしてそれが起こったのか、突然変異として。そこが一番面白いところなんです。これだけの絵柄が、拡大されてこんなになるということが起こっているんですね。これは《2月》の場面(図7)ですけれども相変わらず、うお座、水瓶座、そして、太陽が進んでいるところが描かれています。冬は農閑期ですから何してるかと言うと、木を切ったりお尻丸出しで火にあたっているところなんですけれども、そのような2月の風景が描かれているんです。そうしますと突然変異というよりも、半分はクリエーションであり、半分は伝統だといいましたけど、なぜこのようなものがランブール兄弟によって1410年くらいに始められ、1416年にはおそらく、ペストでベリー侯は亡くなってしまいます。それ以降、この3兄弟は消息が絶たれてしまうんです。この写本は未完成のまま放置されて、40年後に全然別の画家がそれに絵を加えるという形で完成はしていません。それくらい大掛かりな本であったわけです。すると、必然的に北方出身のミニアチュリストたちが、イタリアを体験したのではないか、という疑問がでてまいります。イタリアに出かけて行って壁画を見たという可能性があるのではないかということです。



図7 ランブール兄弟《2月》『ベリー侯の豪華時禱書』より、
1411-16年、シャンティイ、コンデ美術館

さて、皆さんよくご存知のアヴィニョンの法王庁(図8、9)には誰が描いたかわからない、しかしながら、イタリアの影響を受けて、インターナショナル・ゴシックと呼ばれているジャンルに加えられます壁画が描かれています(図10)。法王庁はローマ法王を閉じ込めていたわけで、実に不愉快な建物ですけれども、その不愉快な建物だからこそ壁画が必要だったということです。それが法王の間にあるまさにレジャーを描いたものです。緑豊かな中で魚を釣ったり、ハンティングしたりして、大掛かりな壁画は必ずやイタリアの影響によって描かれたものです。ランブール兄弟はこれを見た可能性が高いです。ベリー侯が住んでいたのは、ロワール川のほとり、そこからアヴィニョンは近いので、これを見た可能性は高いのですが、実際のところはわかりません。

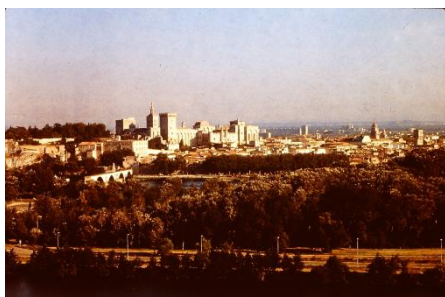


図8 アヴィニョンの都市景観



図9 アヴィニョンの法王庁

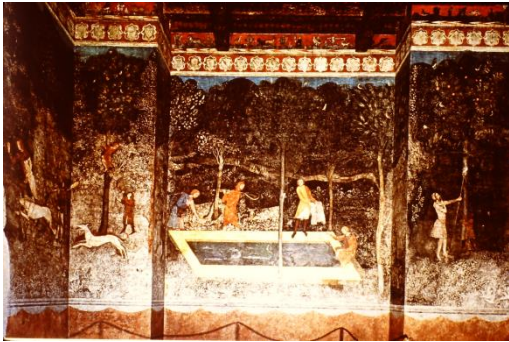


図10 アヴィニョン、法王庁壁画

もう一つはシエナの市庁舎(パラッツォ・プブリコ)です。昔は宮殿ですけれども、今は市庁舎になっています(図11)。これが大聖堂で、この中にロレンツェッティが描いた14世紀の有名な作品があります。それは、《善政》(図12)と《悪政》と呼ばれていて、シエナにいい政治が引かれたときは街はこうなる。美しい女性たちがダンスを踊って平和に暮らしている。これに対して、郊外の田園ではどうかという絵が描かれるわけです。鷹狩りに出かけたり、お百姓さんがいたり、農作業したりしています(図13)。これも実に画期的な風景画という意識のない型破りの大壁画です。多少形象化されていても、丘があつて小高い山がうまく描かれています。ランブール兄弟がこれを見た可能性があると言っている学者はたくさんいます。これも実証できません。そこで、学者たちは何によって実証しようとしているかという、これです。馬や牛を追って坂道を登っている場面です。私は信じませんが、田舎に行けばどこにでもあるわけですから、これを見てランブール兄弟がああ絵を描いたとはとても思えないのですが、この壁画を見た可能性がある。それから、もうひとつは大広間にローマの図というのがあるんですね。豪華時禱書の中に描かれているローマの図(図14)と、ほとんど同じものが隣間に描かれているわけです。これをもって、美術史家たちは敵の首でも取ったみたいに、ランブール兄弟はシエナに行っているはずだと言っているのですが、牛よりかはいいかもしれません。

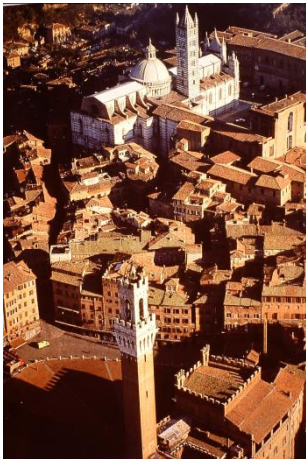


図11 シエナの都市景観



図12

図12・図13 アンブロージョ・ロレンツェッティ《善政》、1338-40年頃、シエナ、市庁舎



図 13



図 14 ランブール兄弟《ローマの図》『ベリー侯の豪華時禱書』より、1411-16年、シャンティイ、コンデ美術館

ランブールとシエナの市庁舎の間に写本のようなものがあったかもしれません。これは壁画ですから、動かすことができないんですけれども、写本はどこにでも動かすことができますから、これを研究するのは厄介なことなんです。

これも学者によって言われていますが、ランブールがトレントの壁画を見た可能性もあります。反宗教改革の会議がここで行われたわけですが、もともとはリヒテンシュテイン公家の大変偉い司教さんの居城だったところです。この中に驚嘆すべき12カ月図があるんですね。ご覧のようにここはトレントですから、となりはオーストリアなんです。だから、北方の人間が先進国のローマに行くときに通る道はいくつもあります。今、ほとんどトリノの方からリヨンに出て、フランスに着くわけです。トレントは、フランスから来てインスブルックを通過して、ミラノに出るちょうど中間地点にあって、向こうはアルプスです。そこに塔があって、その塔の中にすばらしい12カ月図が描かれているんですね(図15-17)。3月の部分がなくなってしまったのですが、11枚の驚嘆すべき大きな壁画が残っているんです。そして、この壁画が描かれたのが、1407年にリヒテンシュタイン司教が神聖ローマ帝国に捕らえられて、幽閉されてしまいますから、それ以前に完成しているということは、ランブール兄弟が1416年に写本の絵を描いたとすれば、時代的には十分観る可能性があって、随分これを証明しようとした学者がいます。もちろんトレントの学者もそうです。それから、このトレントの壁画を描いたのはボヘミア出身の画家だといわれていますけれども、それもわかりません。ただ大変面白いのは、史上初めて絵画の中に雪景色が描かれた作品です(図18)。この後ずいぶん描かれて、ブリューゲルの雪景色なんてご覧になっていると思いますけれども、このトレントの壁画に貴族たちが雪球作って雪合戦しているんですよ。実に可愛いんですけど。ここは寒いところですから、ぶどう摘みはだいたい9月ですけども、ぶどうを摘んで、ワインを作っている図とかですね(図19)。そういった季節の図柄がここに描かれているんです。そして相変わらず天体の12宮のシンボルが描かれているわけですが、おそらく皆さんこれを見て風景画というより風俗画だと考える

でしょうが、まさにそうなんです。この12カ月図からいかに風景画というものが展開していくのかということのイタリアサンプルの一つなんです。ベリー侯の中に出てくる2月の図と比べていただくと、非常に空間が浅いんです。奥行きがないんです。これはフィレンツェの美術の作り方と大変違います。北方派の影響を受けている可能性が非常に高いと思うのは、こういう葉っぱであるとか、神の恩寵であるところの光はこの世界の細部のすべてに宿っているという考え方が北方的な大きな特徴だとすれば、実に細かな木の表現をしているんですね。また、地域的にもフィレンツェとパリの間にありますこのトレントという町は、極めてイタリア的要素と北方的な要素がミックスされて、この壁画はどちらかというとなら北方要素が強い画家に描かれたのだと思います。チェコは今は衰退しておりますが、ルドルフ2世が都を移したくらいですから大変文化的には発達していたわけです。そのチェコ出身のボヘミアの画家だとしたら、イタリアの技術も北方派の技術もよく知っていたということになるわけです。こういうものが現存していて、現在見る事ができるわけです。ランブール兄弟がこれらの3つの場所に行ったかどうか、証明しようとして学者は今も頑張っていますが、決定的な要素は何も見つかっていません。私もわかりません。



図 15 トレント



図 16 トレント



図 17



図 18

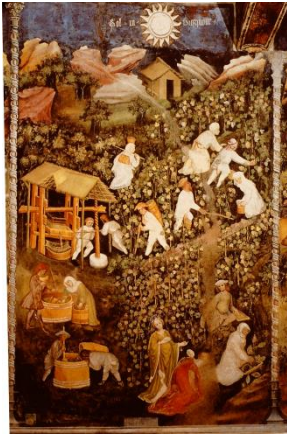


図 19

図 17-19 ボヘミアの画家、トッレ・デッラクイの壁画、トレント、カステッロ・デル・ブオンコンシーリョ博物館

フランスで活躍したランブール兄弟という画家たちが、これを見ているのかは証明できませんが、イタリアの大規模な壁画に触れて、彼らの本の中の挿絵が大型化した可能性があります。ベリー侯はちょっと来ることはできません。アヴィニョンに行くのも政治的理由で問題があつて、つまりアヴィニョンのあたりもベリーの領地だったのですが、取り上げられてしまうという歴史がありますから、お供をつれてアヴィニョンに行くというのはほとんど不可能です。トレントの壁画にせよ、アヴィニョンの壁画にせよ、ベリー侯が命令して「ああいうものを書いてくれ」と注文したともなかなか考えにくいんです。やはりこれは画家のイマジネーション、そういう風に思うしかないと思うんです。この非常に浅いパースペクティブは北方派の特徴ですし、非常に綿密に木を描いている。これはマグパイ(カササギ)という大変頭のいい鳥です。羊、蜂蜜、こういう風俗的要素が次第に風景画の要素に転じていく過渡期にある作品がランブール兄弟のこれらの絵だと思います。

ギヨーム・ド・マショーというフランスの中世音楽の最も有名な作曲家です。その人が注文した写本(図20)の中には、あまり美術史に取り上げられないのは内容が音楽ということ、楽譜が書いてあるということかもしれませんが、そこにまったく人がいない風景画が描かれています。これはベリー侯の時禱書と同じ1400年前後の制作とだいたい同じ頃に描かれて、誰が描いたかわからないのですが、まさに神の恩寵の輝きがあらゆる細部に宿っているというかたちで、立体感はまったくないんです。塔には少し立体がわかる。これはイタリア的な描き方ですが、まさにタピスリーのような細かな表現がされてる。この作品も美術史の中でどういう位置を占めるのか、なかなか難しいんです。ギヨーム・ド・マショーという人はベリー侯とも付き合っていますし、たくさんの写本も残していますが、この研究は進んでいません。ここでは坂道の表現ができないんですね(図21)。イタリア人ならこんなこと描くのはなんでもないので、北方の人間は立体感覚というか、空間感覚がないというわけではないのですが、関心を持ちませんから、なんだかとんでもない坂道を登っているようにも見えますが、シエナの影響となると私は疑問に思ってますけれども。しかしながら、空

間表現ということで言えばこれは明らかに北方の絵ですし、細部の細かなところに神経を注いで非常に美しい写本を作っています。



図 20

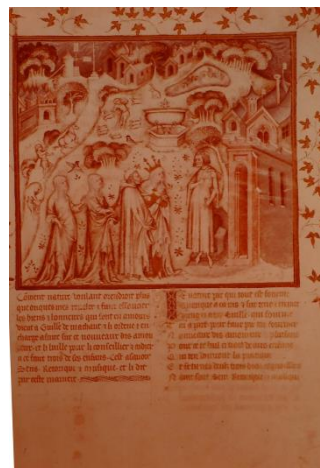


図 21

図 20 《魅惑の園》ギヨーム・ド・マシヨの『獅子物語詩』より、1350 年頃 パリ、国立図書館

図 21 《自然》『ギヨーム・ド・マシヨ詩集』より、14 世紀末、パリ、国立図書館

これは、ブシコー元帥の注文による写本(図22)ですけれども、これはもちろん聖書が主題で、マリアはヘロデ王の幼児虐殺を逃れ、エジプトへ逃げなさいという天使のお告げにより夫のヨセフにロバの綱を引かせ、赤ちゃんを抱っこしているところです。すると、後ろから輝かしい朝日が照り出してきて次第に風景のテーマが、大きな空間を占めるという画期的なすばらしい作品です。



図 22 ブシコーの画家《エジプトへの逃避》『ブシコー元帥の時禱書』より、1405-08 年頃、パリ、ジャック・マール・アンドレ図書館

風景の独立に向かって、絵画が描かれるときのもっとも中心となる主題はエジプト逃避途上の休息という題材で、この展覧会にも、ヘロデ王の兵隊たちを逃れて、ヘロデ王に殺された赤ちゃんをマリアはイエスに見せないように顔を

隠してエジプトへ進んでいる絵(no.9 ドメニコ・フェッティ 《エジプトへの逃避》)が掛かっていますが、そうではなくて、ヘロデ王の兵隊から逃れてやれやれと、赤ちゃんに母乳をあげ、草地でロバにも食事を与えているというマリアの平穏さをあらわすためには、風景が必要なんです。絵画の中心はなんとと言っても人間が中心です。そこから人間同士の関係というかたちで、歴史画というものが20世紀に至るまで絵画の最も重要なジャンルだといわれてきました。つまり、人間というものの在り方には、極端に言えば2つの在り方があります。体積として存在している「Being」。人間の安定した存在感を示すということがあります。しかしながら、人間の場合にはそれだけではまったく、すべての人間性を表現することはできないんです。つまり、「Being、存在」ということに加え「Living、生きている」ということがないと人間の存在は表現されないんですね。人間の在り方としてはこの2つが重要です。そのときに表情だけで、マリアの安らかさというものを表現するのはなかなか難しいんですよ。それにもっとも成功した例は、レオナルド・ダ・ヴィンチの《モナリザ》ですね。顔の表情で彼女の不思議な大変貞淑なお嬢さん、奥さんです。それと同時にレオナルドはアルプスのスケッチブックからモナリザの背景をつくりますよね。そうやって、人物の性格を風景によって表現するという方法が芽生えてきました。このヘラルト・ダーフィットの流れを引いているイーゼンブラントの作品(no.6 《エジプトへの逃避途上の休息》)(図23)も、やれやれというかたちで一方に安らかな風景が描かれる。それが、次第にマリアさまが小さくなり、風景の方が目立つようになって今日の主題であります、風景画の誕生という方向に向かっていきます。そういう流れにある作品です。



図23 アドリアーン・イーゼンブラント《エジプトへの逃避途上の休息》
1520-30年頃、ウィーン美術史美術館

このジョルジョーネの作品(《テンペスタ(嵐)》)(図24)は皆さんご存知だと思いますけど、16世紀のイタリアではこれは単なる風景画だと言われていて、ジブシーと兵隊のある小さな風景画と呼ばれています。この作品に関してはいろんな本が出回っていますが、イタリアの16世紀では、すでにこの作品に対して、「パッサジオ、風景画」という言葉を使っているんですね。

この作品は、ニューヨークのフリックコレクションのベリーニの作品(図25)ですけれど、イタリア的でもあり細部に遍く神の光が注いできている。イタリ

ア的であると同時に北方的要素が非常に強い作品で、ベリーニはヴェネチア派の流れのトップになる人です。

この後、ティツィアーノとか、ジョルジョーネとか、美しい風景を描く作家たちが続くわけですが、そうして遍くこの世のすべてを照らし上げる神の愛寵としての光として言えば、このファン・エイクが描いた《ロランの聖母》(図26)です。これは風景のみならず、その光が室内にも入っている非常に美しい作品で、バルコニーにいる人たちはいったい何をしているのかというと、マリアさまともあろう人が家の中にやってきているのに、関心を示さず風景を見ている。学者たちはこれを見て、風景がだんだん人間の意識の中に高まっていったという見方もあります。



図 24

図 25

図 26

図 24 ジョルジョーネ 《テンペスタ(嵐)》 1510 年頃、ヴェネツィア、アカデミア美術館

図 25 ジョヴァンニ・ベリーニ 《砂漠の中の聖フランシス》 1480-85 年頃、ニューヨーク、フリックコレクション

図 26 ヤン・ファン・エイク 《宰相ロランの聖母》 1434 年頃、パリ、ルーヴル美術館

今回出品されている作品は、本当に無名の画家の作品ですけれど、すばらしい絵です(no.1 《東方三博士の礼拝》(図27))。右上をご覧になると二人の男がマリアさまにそしらぬ顔をして、風景を見えています。これが、風景画のシンボリックな意味では始まりを告げる絵だと解釈する学者もいるくらいなのです。



図 27 南ネーデルラントの画家《東方三博士の礼拝》 1520 年頃、ウィーン美術史美術館

このパティニールの作品(no.11 《聖カタリナの車輪の奇跡》(図28))に描かれた風景は北方派の典型です。こんなに小さい作品ですが、あまり大きい作品では画家の神経もコンセンレーションできませんから、素晴らしい絵ほど小さいと思っただきたい。いくら拡大しても細部がはっきり見えるんです。それぐらい綿密に描かれているんです。ここで殉教しているのは聖カタリナですけども、主題は関係なく宗教的なテーマは小さくなっていくのですが、風景をどうやって描いたのかということがわからないんです。パティニールは現在のベルギー出身ですけども、学者によってはアルプスくらいまでは見ているかもしれない、と言っていますが、そんな記録はありません。アルプス体験というのは北方画家にとっては大変重要で、イタリアに行ったことがあるか、ということが大問題なんですね。イタリアへ行くのに船で行くことは絵描きはありませんから、旅先のスケッチのため、アルプスを越えて行くわけです。ゲーテもワイマールからシチリアまで馬車を乗り継いで行ったわけです。こんな不思議な岩を描いたあたりから、パティニールはアルプスに行っていないんじゃないか、伝聞で、耳で聞いたところを、自分の想像力で補ったとすれば、やはり伝統と革新が50%ずつこの中にあって、それゆえにパティニールは最初の風景画家と言えるのです。



図 28 ヨアヒム・パティニール《聖カタリナの車輪の奇跡》1515年頃、ウィーン美術史美術館

アルブレヒト・デューラーがパティニールのところを訪ねた時に「パティニールはもっともよい風景画家だ」と手記に書いています。デューラー自身も風景画とは何かということをよく知っていたということです。けれども、デューラーも風景画をずいぶん描いているのですが、自分を風景画家とは思っていない。マリアさまの背景を描くために珍しい風景のスケッチをしている。イタリア旅行をしてイタリアの山を描いたりしている。そこには人はいません。ドイツの学者たちはアルトドルファーであるとか、デューラーであるとか、イタリアに行った人たちが日記のつもりで書き残したスケッチをもって、最初の風景画といいますけれども、風景画というのは一枚の絵があるから、それが風景画の始まりとは言えないんです。人間の広い意識の中に一般化されることによって、ひとつのジャンルとしていつ定着したか、これは明らかです。17世紀のオランダ以外ありえないんです。しかし、それ以前にベースとなったのは、この12カ

月図、それが大きく伝統として意味を持っているんじゃないか、というのがこの展覧会の趣旨なんです。

シモン・ベニングという16世紀の画家(図29)になりますと、貴族階級から離れていって庶民とは言いませんが全部市民ですね、ベルギー、オランダに生まれてくる神教国家に生まれてくる市民たちを対象にしていきます。つまり、カトリックの束縛から離れた、あるいは神聖ローマ帝国のスペインという強国の強制政治から逃れてオランダが独立するとオランダの画家たちはオランダの新しい市民階級のために、オランダまで行くことは少ないのですが、アントワープに集まってそこで絵を描くと隣のオランダにも売れるし、宗教的絵画はベルギーにも売ることができるという地の利を得るわけです。そうやってアントワープは大きな工房を構えられる土地になるんです。そうやって貴族階級、宗教からも離れていきます。



図 29 シモン・ベニング《フランドルの暦》1530年頃、
ロンドン、大英図書館

2月は寒いですから、薪を切って暖炉が燃えていて、赤ちゃんを暖めている。こういった風俗画的要素になって、風景画という意識が観る人の間に高まってくる。そうやって、17世紀の風景画の独立という話がうまれるわけです(図30)。この作品(図31)では、火が燃えてますから、シモン・ベニングという人はランブールを受け継いだとも言えます。不思議なことにベリー侯が1416年に亡くなってから、この写本はあちこちに流浪するわけです。

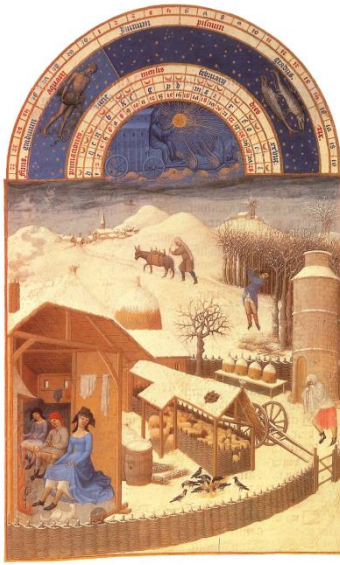


図 30

図 30 ランブール兄弟《2月》『ベリー侯の豪華時禱書』より、1411-16年頃、シャンティイ、コンデ美術館

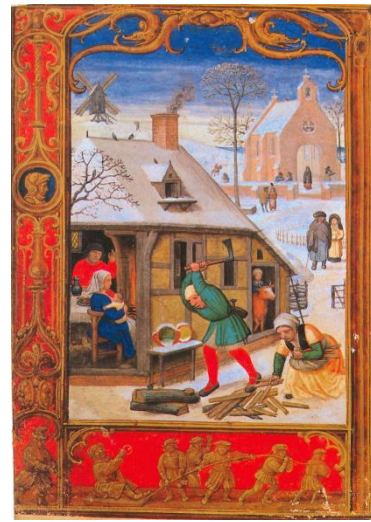


図 31

図 31 シモン・ベニング《1月》『フランドルの暦』より、1530年頃、ロンドン、大英図書館

北方派の人たちはほとんど影を描きませんが、《10月》(図32)では、案山子が影を持っているんですよ。フランス北方派の美術の歴史で言いますと、こうやって影を描くことを北方派の画家が習得するのは、1440年以前にはあり得ないと言っています。すると、この写本は、あちこち流浪しているうちに誰かが描いてしまったのかもしれない。例えば、1440年以降に誰かがこれを描いたかもしれない。今、シャンティイ・コンデ美術館にはファクシミリが飾ってあります。いずれにせよ、非常に画期的な作品である。これを、ランブールが描いたとすれば、当然イタリア的要素から、イタリアに行っているということになりますが、わかりません。

こちらの《9月》の場面(図33)で種を蒔くとマグパイ(カササギ)がやってきて、食べてしまう。これはゴルフブックといわれているんですが、ここに子供たちが玉を持って遊んでいる。ブリューゲルの子どもの遊びなどの作品でよくご存知のとおりですね。シモン・ベニングの時代になりますと、少しずつ影のことがわかってくる。15世紀の半ばになると、イタリアからの影響で陰影法というのが、北方派に伝わっていく、そういう作品です。



図 32

図 32 ランブール兄弟《10月》『ベリー侯の豪華時禱書』より、1411-16年頃、シャンティイ、コンデ美術館

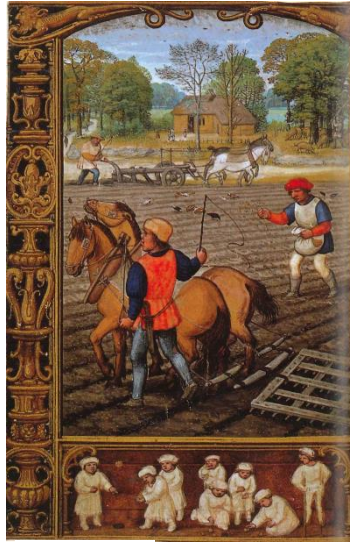


図 33

図 33 シモン・ベニング《9月》『フランドルの暦』より、1530年頃、ロンドン、大英図書館

そして、問題のバッサノの作品、彼は出身地の山を誰かの注文によって描く必要があったため、風景はほとんど同じです。イタリアはローマでも雪は降りますけれども、そんなものを描こうと思った人はいないんです。だから、さっきのトレントの作品が史上初めて描かれた雪景色だと言いました。その後はどんどん出てくる。雨の作品って皆さん、思い出せますか？ゴッホは雨の作品を3点描いていますが、これはもちろん広重のコピーです。ヨーロッパはいくらでも雨が降るのに、雨が降っている状況を描くなんてほとんどないんです。ただし、シエナのロレンツェッティが、これもまた奇異なことで、雨の中に貴族が立っている作品を残しています。これは、例外中の例外で今言っているように天道とは何の結びつきはないのですが、トレントの作品の中には雪景色が出てくるし、レアンドロ・バッサノの作品(no.27 《1月》(図34))の中にも非常に細かな雪が降っている情景が描かれている。こちらも非常に珍しい、しかしこれは天道と結びついているだろうといえます



図 34 レアンドロ・バッサノ（本名：レアンドロ・ダ・ポンテ）《1月》1580-85年頃、ウィーン美術史美術館

そこから、ブリューゲルはすぐそこです。ブリューゲルは神聖ローマ帝国の歴代の皇帝が集めています。これはメトロポリタン美術館の作品(《穀物の収穫》(図35))です。本展に出品されているのはこの10年後に描かれたファルケンボルフの作品(no.41《夏の風景》)です。ブリューゲルの月暦画は不思議なことに5枚残っているの、6枚あったのではないかと考えられています。12カ月を4カ月に近づけて、四季図と12カ月の間の表現として、小麦の刈り入れを描いたわけですね。冬を前にした牛追いたち、放牧場から牛小屋に冬を越させるために、連れて帰るという情景です(《牛群の帰り》(図36))。パティニールからずいぶん違ってきたのは、ブリューゲルは、幻想めいた青色から、自然に近い緑色を多用して描いていくのがやはり、ブリューゲルのブリューゲルらしいところです。新しい「リノベーション、創造」だと思います。

《雪中の狩人》(図37)はあまりにも有名なウィーンの宝物です。風俗画ですが、我々は風景画として見るわけです。我々がどう見るかということが風景画の成立になるわけです。これが重要なんです。



図 35



図 36



図 37

図 35 ピーテル・ブリューゲル《穀物の収穫》1565年、ニューヨーク、メトロポリタン美術館

図 36 ピーテル・ブリューゲル《牛群の帰り》1565年、ウィーン美術史美術館

図 37 ピーテル・ブリューゲル《雪中の狩人》1565年、ウィーン美術史美術館

さてもうひとつ重要なこと、なぜ私が12カ月図にこだわっているかという、キリスト教世界の時間感覚というもの、さっき人間は空間と時間の中に生きている、両方揃っていないと意味がないという言い方をしましたけれども、これはベリー侯の写本の中に描かれている世の始まりの図(図38)です。アダムとエ

ヴァを神様が造っている。そこから次の地獄落ち(図39)まで1000年間の間、キリスト教の時間というものは世界の創造から世界の終末、最後の審判以降に地獄に落ちるよ、というところまでの1000年単位の一直線の流れ、これは大変不安です。直線的な時間ですからね。



図 38

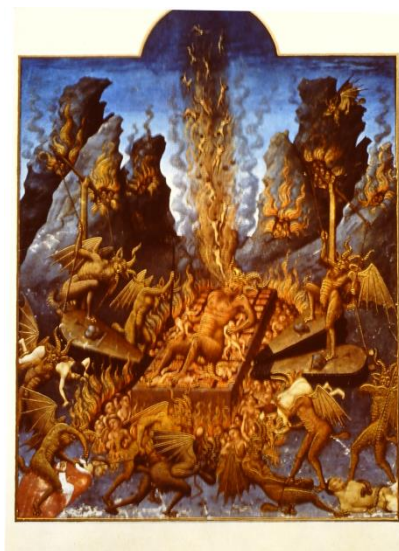


図 39

図 38 ランブール兄弟《楽園》『ベリー侯の豪華時禱書』より、1411-14年頃、シャンティイ、コンデ美術館

図 39 ランブール兄弟《地獄のイメージ》『ベリー侯の豪華時禱書』より、1411-14年、シャンティイ、コンデ美術館

ベリー侯の顔をお見せします(図40)。ベリー侯は何をしているか、天国の鍵を預かっている聖パウロに手を引かれ天国に行こうとしているんです。これがこんな莫大な、お城が何個も建つようなお金をかけて、この本一冊を作った人の非常に単純な望みは天国に行くことなんです。そういう一直線の恐れがあるのです。ですから、時禱書が発達するのも1000年が近づいてきた、つまり900何年となるとキリスト教の人たちは恐れていました。その恐れでとんでもない費用をかけて、作らせたこのカレンダーというものがどういう意味を持っているかということが重要になるんです。



図40 ジャック・マール・ド・エダン《天国へ誘われるベリー侯》『ベリー侯の大時禱書』より、1409年頃、パリ、国立図書館

カレンダーの表現というものは1年のサイクルで考えているんです。つまり1月から始まって、ぶどうの手入れをして、小麦を刈り入れて、ぶどう酒を作って、豚を食べて、クリスマスに1年が終わる。同じことが、また来年も返ってくる、こういう確信が人間の生活の中には必要なんです。最後の瞬間ばかり頭に入れていたら、頭がおかしくなります。来年も夏には葉山に行って泳ごうね、山のほうに行って散歩しようね。こういうことが定期的に繰り返されることが、キリスト教の一直線的な時間の概念を和らげる役割をしている。その典型的なものが、絵画における主題がこの12カ月の展開。毎年、12月25日にはキリストの誕生日を祝うお祈りを同じ時間にするんです。そのことが全部書いてあるんです。このお祈りの本の中に。そうやって、我々は救いを得る。安寧を得る。こういった極めて深層心理的な内容を12カ月図というものがヨーロッパにこれほどまで流行する力を持っているのではないのでしょうか。

それはすなわち、風俗だけではないんです。人間の人体にいかに影響を与えるか。ミクロコスモスとマクロコスモスが同調していて、皆さんは週刊誌で星占いを楽しんで見ているんでしょうが、そんな生易しい、軽いものではなく、実に真剣に考えていました。例えば、サソリはお腹に影響を与える(図41)、つまり全世界像というものが、12カ月の中に内包されている。それゆえにこういうところに、サソリやカニがいるんです。そういう世界観。つまり、12カ月図は単なる農事暦から世界観まで広がっていくことによって、広大な世界を相手にするから当然、風景画が重要視される、そういう展開であったであろうと思うのです。



図 41 ランブール兄弟《人の十二カ月と天の十二宮》『ベリー侯の豪華時禱書』より、1411-16年頃、シャンティイ、コンデ美術館